

板木をめぐる ― 『芭蕉翁発句集』の入木 ―

永井一彰

はじめに

平成十年の春、奈良大学が京都の古書店大書堂を通じて購入した約五百枚の板木の中から、『おくのはそ道』と『芭蕉翁発句集』の板木が発見されたことは、同年秋のマスコミ報道によって既に御存知かと思う。この折に大書堂が扱った板木は約千百枚に及ぶのだが、そのうちの約六百枚は仏書いわゆる内典で、こちらは大谷大学に納められることになった。奈良大学に入った約五百枚は、仏書以外の外典である。もともとこの千百枚の板木は、現在も寺町五条上ルで古書店を営んでおられる藤井文政堂こと山城屋佐兵衛さんの蔵するところであった。それが昭和二十三年頃に、藤井さんにとっては不本意な形で流出し、大書堂が引き取るまでの約半世紀の間、市内の木工店に眠っていたのである。ちなみに、藤井さんは現在も約五百枚程の板木を所蔵しておられる。またその後の調査で、昭和三十年代に木工店から板木を一部譲り受けた人がいることも判明した。市内で印章店を営まれるN氏である。更に、N氏から板木を譲られた同業者Y氏の存在も浮かんで来

た。両氏併せて約二百枚の板木を今も大切に保存しておられる。藤井さん、N氏、Y氏御所蔵の板木は、今奈良大学へ貸し出していただき、奈良大学の分と併せ整理・調査中である。大谷大学へ入った分も、調査が進められていると聞く。その数は併せて約千八百枚に及ぶ。藤井文政堂に伝わる『万延元年庚申卯月改正 文政堂蔵板目録』によれば、当時の蔵板の枚数は約二千七百枚であった。その後、文政堂は明治に入っても板木を買い増ししていった形跡があり、明治末には三千枚を超えたと思われる。大量流失、木工店・印章店での再利用による消滅、文政堂の火事などによる焼失、虫損に伴う廃棄、それに近來日本の文化的状況を考える時、藤井文政堂旧蔵の板木の半分以上がともかくも残り、そして学術資料として使用し得る状況になったのはともかくにも慶ぶべきことであろう。

では、板木の学術的価値はどこにあるのであろうか。それは、近世の出版研究に携る者の立場から言えば、印刷された版本からは絶対に分からない出版現場の生の情報が板木には残されている

という点にある。つまり、出版書肆や職人が何を考えていたかが板木には形として生々しく残っているのである。仮に一枚の板木から二つの情報を拾うことが出来るとすれば、千八百枚の板木からは三千六百の情報が集まる。その情報を版本から得られる情報とつきあわせることによって、近世出版工場のありさまがかなり具体的に浮かび上がってくるはずである。板木は近世出版工場の扉を開くいわば鍵なのである。以上の観点から、この稿では、今回出現した『芭蕉翁発句集』の板木の刊記部分に見られる奇妙な入木に焦点をあて、近世出版工場の片隅を覗いてみようと思う。

『おくのほそ道』と『芭蕉翁発句集』

本論に入る前に、『おくのほそ道』と『芭蕉翁発句集』の版権の推移・板木の伝来経路、それに今回出現した板木の概略について簡単に説明をしておくことにしよう。

まず、『おくのほそ道』であるが、これは元禄十五年（十二年説もある）に京都の井筒屋庄兵衛が素龍清書本を模して出版したのが最初の版本である。ただし、その折に何故か素龍の跋文を省き、替りに井筒屋本人のものと思われる跋文を添えている。その後、明和七年になると、伊賀上野で去来の写本を発見した蝶夢によって素龍の跋本が復活し、更に去来写本の奥書と蝶夢自らの由来書を添え、合計四丁を増補して出版されることになる。この段階ではまだ井筒屋の単独版であっ

たが、安永七年には橘屋治兵衛との相版となる。そして、天明八年一月の京都大火で井筒屋は罹災し、所蔵の板木の殆どを失うことになった。九十年近く使用されて来た『おくのほそ道』元禄版の板木もこの折に焼失したらしく、翌寛政元年の八月、井筒屋はやはり橘屋との相版で『おくのほそ道』を再刻再版する。この寛政再刻版は元禄版を模したものであるが、元禄以来の井筒屋の跋文は省略している。従って、寛政版『おくのほそ道』は本文五十三丁に素龍跋・去来写本の奥書・蝶夢由来書・刊記の四丁を加え、計五十七丁という構成に落ち着くことになった。それから約二十年後の文化五年頃、この『おくのほそ道』をはじめ、もとは井筒屋の単独版であった蕉門主要俳書『芭蕉翁発句集』『笈の小文』『枯尾花』『葛の松原』『続五論』『新百韻』などの版権が諧仙堂こと浦井徳右衛門に移り、その蔵板となる。なお、寛政七年に半紙本七冊としてまとめられた『俳諧七部集』の版権も、同時に諧仙堂に移ったと考えられる。蔵板となった段階で諧仙堂は刊記部分に入木を施し、『おくのほそ道』はそれ以降井筒屋・橘屋・浦井の三書肆相版のスタイルをとることになった。今回出現した板木は、素龍跋・去来奥書・蝶夢由来書それに諧仙堂が入木を施した刊記部を同じ板に収めた四丁張の一枚である。刊記部の入木の詳細については後述するが、この一枚をもとに考えてみると、寛政版『おくのほそ道』の板木は四丁張で仕立てられ、板木は全部で十五枚あったということになる。極めて単純な割算なのだが、これも版本からはわからない板木の情報である。では、その板木がいつごろどのようにして文政堂に移っ

たのであろうか。弘化四年刊の横本『俳諧七部集』の巻末に添えられた「諧仙堂藏板目録」には『芭蕉翁発句集』などと並んで『奥の細道』が見え、この時にはまだ諧仙堂の藏板である。その諧仙堂が没するのは安政五年のこと。一方、前引の万延元年『文政堂藏板目録』には「奥の細道 四枚」という記載がある。安政五年の二年後が万延元年にあたる。おそらく諧仙堂の没と相前後してその藏板が本屋仲間の板木市に売りに出され、『おくのほそ道』の板木十五枚のうち四枚を文政堂が買い取ったのであろう。なお、この時期、京都の本屋仲間では一つの本の板木を分割所有することが常態化しており、『おくのほそ道』の場合も三軒か四軒による分割所有であったと推測される。

次に『芭蕉翁発句集』である。この書は最初、半紙本二冊年次別という構成で、安永三年に井筒屋から出版された。編集は蝶夢である。ところが、安永五年には小本二冊に装いを改め、類題年次別とも言うべき内容に再編して、やはり井筒屋から出版されることになった。これは、『おくのほそ道』元禄版の板木が九十年近く使用されたのと対照的な出来事で、当時の出版物としては異例に属する。わずか二年で半紙本の板木を潰し、類題優先の小本に切り替えたのは何故か。五年版小本の蝶夢序文によれば、この切り替えは井筒屋の側から持ち出されたらしく、安永三年出版の『類題発句集』の好評にあやかうとしたものと考えられる。この安永五年版小本には、管見の範囲内では橋屋との相版はない。が、これも『おくのほそ道』と同様に天明八年の大火で板木が焼失し、翌寛政元年八月に橋屋との相版で再刻再版さ

れることになる。この寛政版『芭蕉翁発句集』もやはり安永五年版を模し、小本二冊、上下巻とも三十九丁仕立てで、下巻の廿九丁裏に刊記を入れる。その後、文化五年頃に諧仙堂の藏板に帰したことは『おくのほそ道』の場合と全く同じである。藏板に帰したあと、諧仙堂は下巻廿九丁裏の刊記を削除し、替りに諧仙堂藏板の「俳諧書籍目録」に新しい刊記を添えた一丁を増補していることが現存の版本から知られる。今回出現した『芭蕉翁発句集』の板木は、諧仙堂が刊記部に手を加えた寛政版のそれで、四丁張の四枚。その内訳は、上廿一・廿二・廿三・廿四で一枚、上廿七・廿八・廿九丁で一枚（この板、廿九丁の隣の一丁分は彫り残しの白板のまま）、下廿一・廿二・廿三・廿四丁で一枚、下廿七・廿八・廿九丁・書籍目録及び刊記で一枚となっている。この稿で特に問題として取り上げるのは、四枚目の廿九丁と書籍目録及び刊記を収める半面で、これについては後で図版を示して詳述する。これも板木が出て来れば単純な割算で解決するのだが、寛政版『芭蕉翁発句集』の板木は題簽を除き全部で二十枚あったという計算になる。文政堂の万延元年藏板目録には『芭蕉翁発句集』は出て来ない。しかし、『おくのほそ道』の板木と相前後して板木市に売りに出され、文政堂が全体の五分の一相当を買ったと考えてはば間違いない。なお、『おくのほそ道』の板木は文政堂が所持していた四枚のうち一枚しか残らなかったのであるが、『芭蕉翁発句集』の場合、上下巻の同一の丁の板木が一組で残っていることは注目してよいかと思われる。つまり、『芭蕉翁発句集』の板木は、文政堂が他の三、四

軒の本屋と分割所有していたものが、そっくりそのまま残った可能性がある
があると言ふことである。

『芭蕉翁発句集』の板木の入木

では、問題の『芭蕉翁発句集』の板木に見られる刊記部の入木について見て行くことにしよう。なお、以下の図版のうち、特に断らないものは奈良大学蔵本による。

図1は寛政元年再刻二書肆版の下巻廿九丁裏の刊記である。この刊記は譜仙堂蔵板となった三書肆版では図2右側のように削除され、替りに譜仙堂の書籍目録に刊記を添えた一丁が増補される。図2の左側

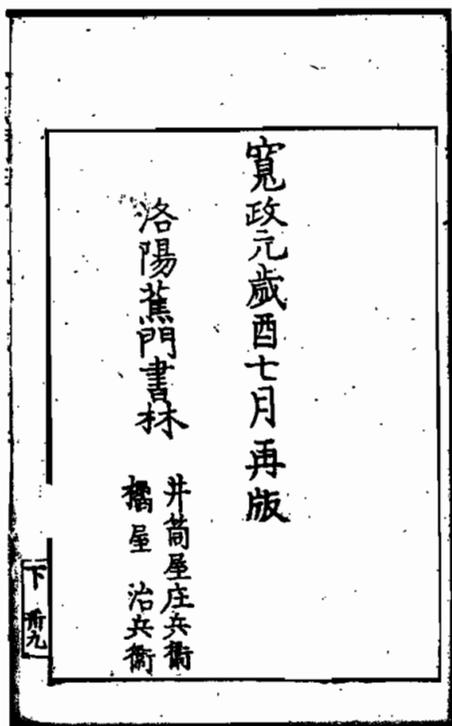


図1

がその丁の表、図3が裏である。版本からはここまでしかわからない。これを板木と対応してみよう。図4は該当の板木を拓本にとって縮小したもので、先にも触れたようにこの板の裏面には下廿七、下廿八丁が彫ってある。図4の左側が下廿九丁、右側が増補された一丁である。ところで、この一丁が増補された面は寛政元年に再刻された当初は、何も彫らないまま残してあった面のはずである。『芭蕉翁発句集』は、安永五年版・寛政版とも上下それぞれ三十九丁仕立てであることは先述したが、冒頭から四丁張で板木をこしらえて行けば、上下とも当然一丁分の彫り残しが出る。実際に上巻末尾の板木も、廿九丁の隣の半面一丁分が白板のまま彫り残してあることも先に述べた通りである。そのような目で見てみると、図4の板木の右側書籍目録の面は、左側の廿九丁を収める面よりも墨のつき方が浅いことに気がつく。これは図版では示しようがないのが残念だが、廿九丁の面は書籍目録が彫り足されるまでの間、具体的には寛政元年から文化五年までの約二十年間、印刷されて来た分だけ墨のつき方が深いのである。これもまた、版本からはわからない板木のみが持つ情報と言えよう。さて、書籍目録一丁の増補は、廿九丁裏の刊記を削除したことに伴うものであった。板木を見ると、ここに彫ってあったはずの刊記は確かに削り取られている。しかし、不審なのはこの刊記部に二箇所、入木をして削った跡が残っていることである。その形跡は拓本からもわかるが、念のため図5として写真を一枚示しておこう。もとより削ったあとで入木をする理由は何もないのだが、入木をしたあとで削っていることは刀の入

これについては、同じ折に刊記部に入木が施された『おくのほそ道』の板木が何よりもその有力な傍証となる。図9が『おくのほそ道』板木の刊記部分の拓本である。「寛政元年酉仲秋再板／諧仙堂蔵板」とある箇所と、橋屋の左側の「浦井徳右衛門」の箇所が入木してあるのはおわかりいただけるであろう。図8は、この入木した版木で刷った三書肆版の刊記。図7が、諧仙堂が入木を施す前の二書肆版の刊記である。二書肆版の年記の右側に確かに幾分かの余裕は感じられる。しかし、そこへ年記より少し大きめの字で「諧仙堂蔵板」と入れるには、やや無理があったのであろう。そこでこの部分全体を削って、年記の文字を少し小さめに、「諧仙堂蔵板」を大きくして入木したのである。その入木の結果、井筒屋の右側には、「浦井徳右衛門」と入れる

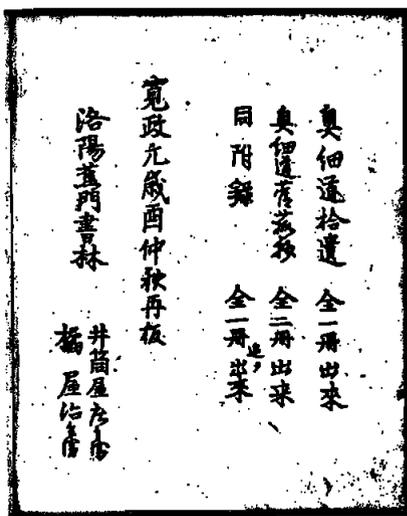


図7

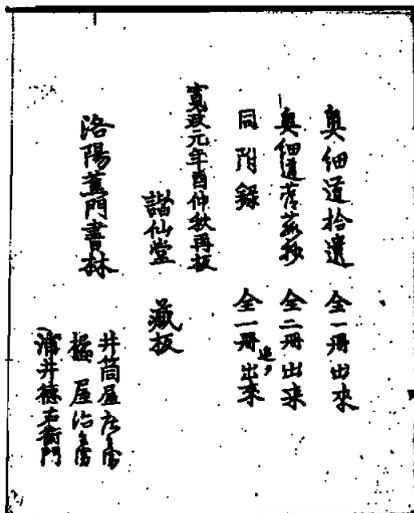


図8

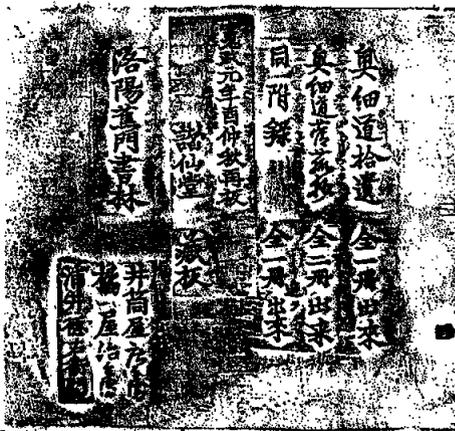


図9

余裕が全くなくなってしまう。そこでこの一行は、橋屋の左側に回ることになったのだと思われる。なお、この「浦井徳右衛門」の入木にはまた別の不審がある。というのは、図10に写真で示したように、わずか長さ4.7厘幅1.1厘ほどの小さな入木であるのに、わざわざ二分劃してあるからである。しかも、上の「浦井」の分割に、下の「徳右衛門」の「徳」の傍の上部をかけるという実に煩瑣とも思えるやり方をしている。これはこれで別に考えねばならぬ問題であるが、今回はとりあえず指摘に留める。

次に、板木そのものは残っていないが、『おくのほそ道』『芭蕉翁発句集』と同様、諧仙堂の蔵板となった段階で刊記に手が加えられた『枯尾花』『笈の小文』『俳諧七部集』の例を見ておくことにしよう。

図11（富山県立図書館志田文庫蔵本による）は、天明大火後に再刻されたと思われる井筒屋・橘屋相版の『枯尾花』下巻最終丁の裏で、左寄りに刊記がある。図12（天理図書館綿屋文庫蔵本72・41による）は、諧仙堂が加わった三書肆版の刊記。見比べてみれば明らかのように、もとの二書肆版の刊記を生かして、「皇都 諧仙堂 蔵板」「浦井徳右衛門」の二箇所を入木で補訂している。この場合も、「諧仙堂蔵板」の一行は書肆名よりも大きめにしている。『おくのほそ道』と『枯尾花』の場合には、もとの刊記を生かして入木補訂がうまく行った例である。しかし、もとの板木の仕立て方によっては入木補訂では対応し切れず、刊記部全体を彫り直さねばならぬ場合も当然出て来る。『笈の小文』の場合には、その例に属する。図13（大谷大学図書館蔵本による）は、天明大火後の

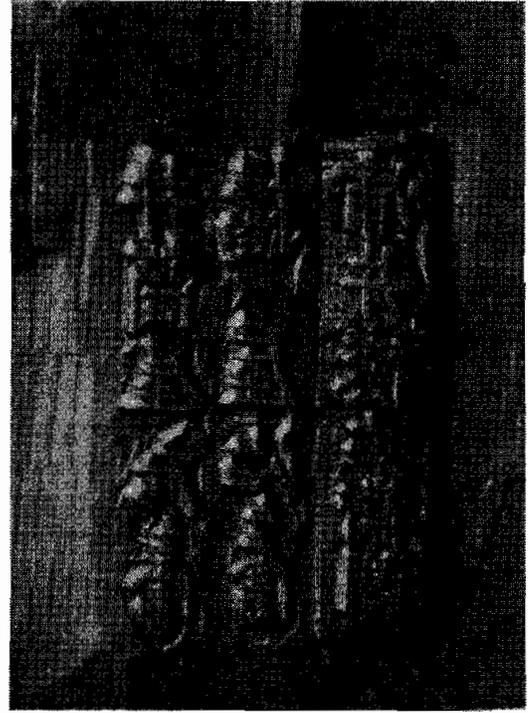


図10

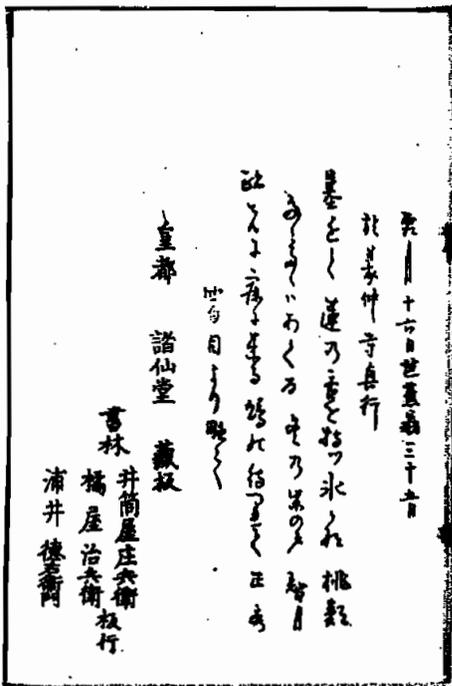


図12

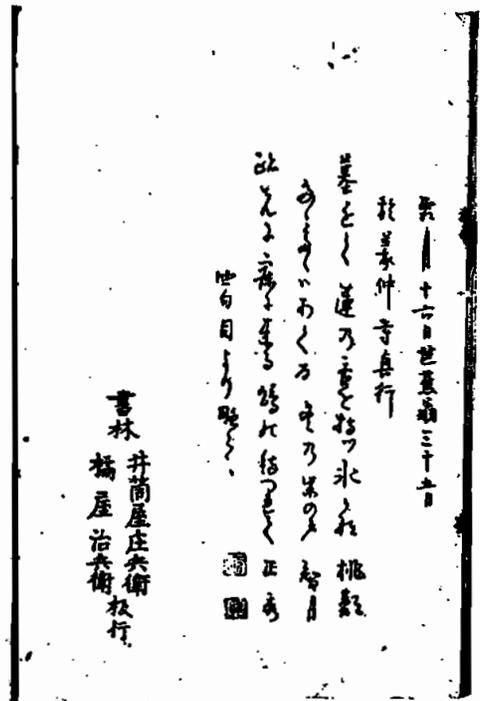


図11

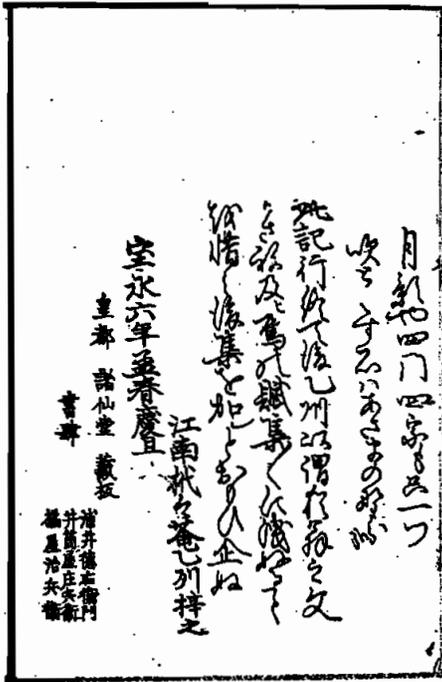


図14

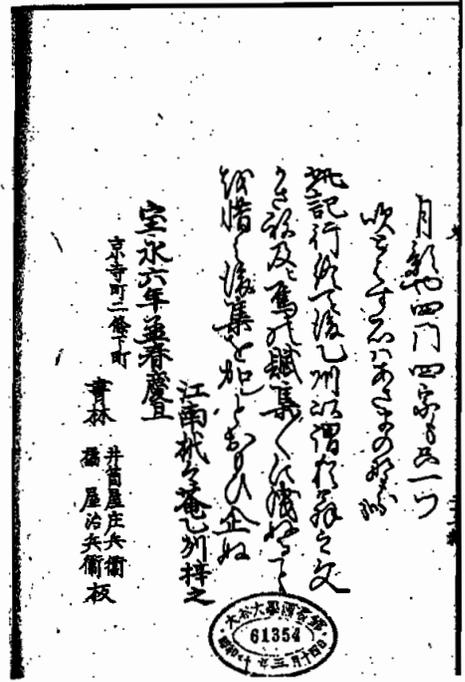


図13

再刻と目される井筒屋・橋屋相版『笈の小文』の最終丁の裏で、左隅に刊記がある。図14（天理図書館縮屋文庫蔵本88・15による）が諸仙堂が加わった三書肆版の同一箇所。一見して明らかのように、この刊記部分は全体を彫り直しての入木であることが知られる。宝永六年の平野屋佐兵衛版以来、もともとこの刊記部分は余裕がなかった。図13にあげた二書肆版も、ぎりぎりの所で収まっている感じが強い。部分的な入木によって「諸仙堂蔵板」「浦井徳右衛門」の二行を入れるのは不可能という判断で、刊記部分全体を彫り直し入木したのであろう。なお、この場合も「諸仙堂蔵板」の文字は書肆名よりも大きめにしている。

さて、この『笈の小文』と同様、刊記部全体を彫り直しているものに寛政七年に半紙本七冊としてまとめられた『俳諧七部集』がある。図15（松本文庫蔵本による）が、寛政七年の初版と考えられる筒井（井筒屋）・中川・野田（橋屋）の三書肆相版の刊記、図16（東京大学竹冷文庫蔵本86による）が中川の替りに浦井が加わった後刷本の刊記である。従来、この後刷本の刊記については、「諸仙堂蔵板／寛政七年乙卯春三月再刻」の二行と「浦井徳右衛門」の部分が入木であるという見方も一部では行われて来たが、それは原本に拠らなかつたための誤解で、この刊記は明らかに全体を彫り直してある。ちなみに、『俳諧七部集』全七冊の本文について初版と後刷を対校してみると、諸仙堂蔵板となった段階で七部集の誤字を正すという意識では四百箇所にわたって入木修訂が施されているものの、『春の日』の七・八・十五・十六丁を除き、板木そのものはかわっていない。『春の日』の四丁分だけ板木

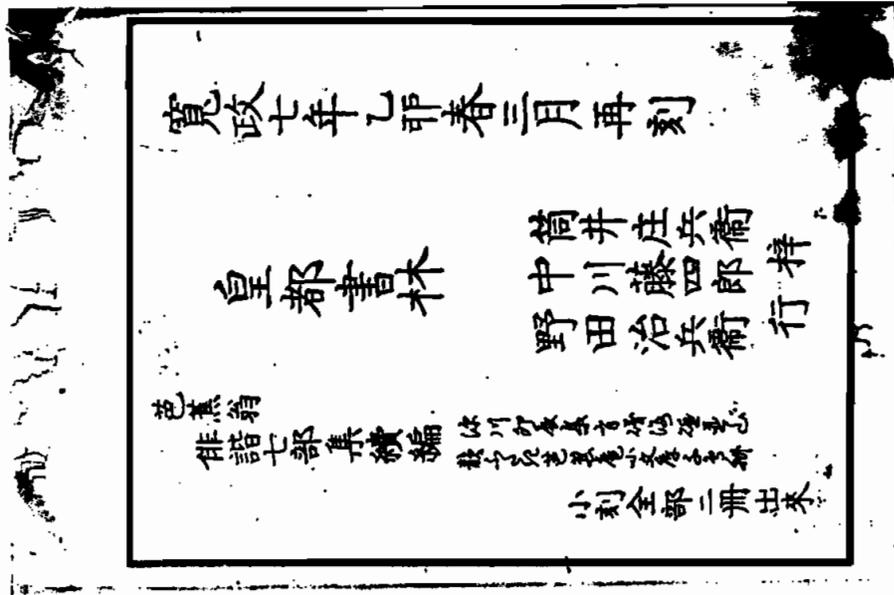


図15

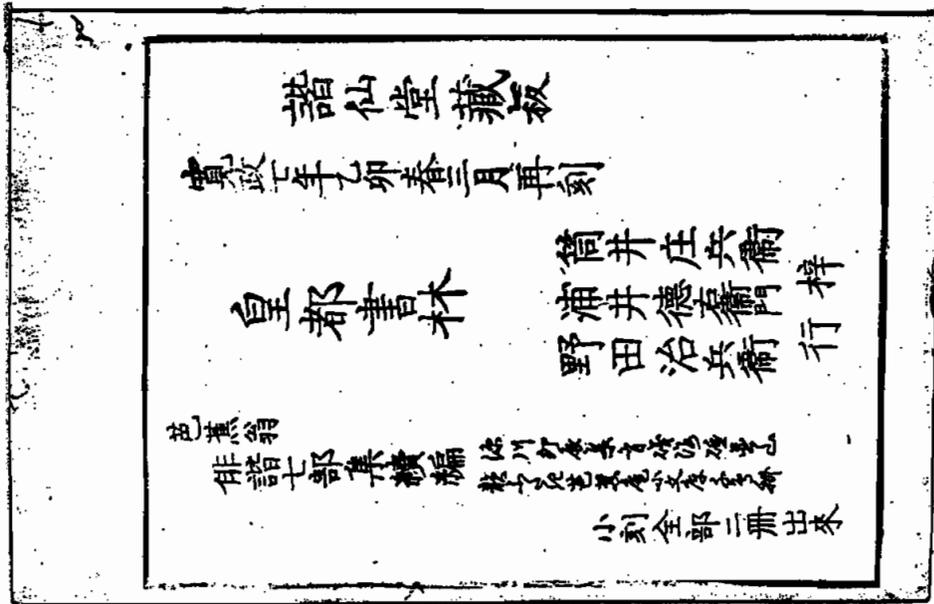


図16

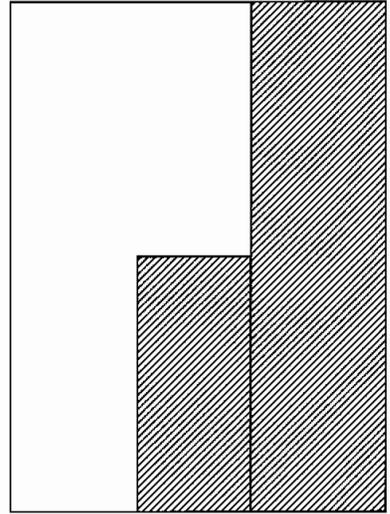


図17

が改まっている理由については単純に考えれば四丁張の板木が一枚紛失したということになるが、あるいは『春の日』の版権の問題が背後

に潜んでいるのかもしれない。が、いずれにせよ、その事情は刊記部分の彫り直しとは少し違うような気がする。刊記部分の彫り直しは、おそらく以下の理由による。初版の年記の左右には幾分かの余裕があった、そこに「諧仙堂蔵板」と入れるのは不可能ではない。しかし、それを年記より少し大きめの字で入れるのは難しいし、仮に出来たとしても年記の右に入れば左が空き、左に入れば右が空いてバランスがよろしくない。そうすると考えられるのは、初版の年記を削って『おくのほそ道』や図16の後刷本のスタイルで入木をすることである。この箇所はそれで処理出来たとして、やっぱりなのは書肆名の部分である。『おくのほそ道』『枯尾花』の場合は、井筒屋・橋屋と並んだ左に浦井を補えばそれで事は足りた。『俳諧七部集』は差し換えねばならぬ中川の名が、まん中にあるのである。左右の筒井・野田の部分を痛めないように中川の名を削り取り、しかも左右と同じぐらいの大き

さの字で入木をすること、それがこの場合は非常に困難だったのでないだろうか。残された手段は、書肆名の三行分も彫り直して入木をするというやり方である。つまり、入木という方法では図17の斜線部のように、この刊記全体の半分近くに手を加えなければならなくなるのである。ならばいっそ全体を彫り直して、というのが実状ではなかったらうか。

以上、『おくのほそ道』『枯尾花』『笈の小文』『俳諧七部集』の刊記補訂のありさまを見て来たが、これを要約すれば、諧仙堂はこれらの板木が蔵板に帰した段階で、出来るだけもとの刊記のスタイルを生かしながら「浦井徳右衛門」の名前を加え、かつ「諧仙堂蔵板」を少し大きめに入れようとしたということになる。結果、部分的な入木では対応出来ず全面彫り直しという例も『笈の小文』『俳諧七部集』に見られた。『芭蕉翁発句集』の刊記部の板木に残る入木の跡が、「諧仙堂蔵板」「浦井徳右衛門」と入木した跡であることは、まず動かない。問題は、入木をした後で削除したのは何故かということである。これについては二つ考えられると思う。一つは、入木をして暫くの間印刷販売したが、いつかの段階で書籍目録を増補することになり、その折に削除したという考え方である。つまり、図6の空白部にそれぞれ「諧仙堂蔵板」「浦井徳右衛門」と刷りこんだスタイルの三書肆版『芭蕉翁発句集』が出て来る可能性も、全くないわけではないということである。もう一つは、入木をしたものうまく行かなかった、また入木は収まったが刊記全体のバランスが気に入らなかった。そこで、

もとの刊記ともども削り取って、替りに空いていた板木の半面に一丁を増補したという考え方である。どちらか推測としては成り立つが、『笈の小文』『俳諧七部集』の例を見る時、私は二つめの場合を想定するのが穏当ではないかという印象を強く持っている。

かくして、『芭蕉翁発句集』の刊記部の板木に残る不審な入木の跡は、諧仙堂蔵板排書の刊記補訂の見直しにつながる実に貴重な情報だったのである。

*この稿は、平成十年度奈良大学研究助成によるものである。

A Study on Printing Blocks

— *Ireki* used in *Collected Hokku of Basho* —

Kazuaki Nagai